

平成 28 年 5 月 16 日（月）

社会福祉法人東北福祉会せんだんの里
千脇 隆志

はじめに

東日本大震災より、5 年が経過しようとしています。経過とともに「変わっていくこと」「変わらないこと」など、様々な想いを感じています。最近では、広島市の災害など、日本全国どこにいても、自然災害というものは避けては通れないということを痛感しています。

さて、東日本大震災を経験し感じたことは、日頃からの防災教育の重要性です。一般的に知られているのは、岩手県釜石市の防災教育です。釜石市内の小学校 1,927 名、中学生 999 名があの大津波から助かったことが示しています。当時、病気等で学校を休んでいた 5 名が不幸にも亡くなりましたが、釜石市内の小中学校生徒の生存率は 99.8% という数字になっています。

...

～抜 粋～

...

まとめ、今後の課題

いつ、どこで起こるか分からない自然災害。特に高齢者・障がい者施設において、地震から利用者を守るということは、リスクや防災という考え方、つまり「知識」や「意識」をどう関連づけ、教育していくかが重要と考えます。

まずは、想定されるリスクに対し、事前の対応策などを具体的に話し合うことが必要であると考えます。しかも、全職員が理解をし、自分で動けるということである。「知っているつもり」ではなく、「確実に動ける」ということです。そのためには、自分で動けること・知ることの「動機づけ」し、実践に即した防災訓練等を定期的に行い、評価をし、意識を高め、あわせて防災マニュアル等を定期的振り返り、見直しをしていく必要があります。

自事業所においては、また日常の生活に戻っています。いわゆる対岸の火事です。想定外ではすまされないので、いかに、全職員に意識を高めていく仕掛けづくりをしていくことが今後の課題です。